10月にせまる――

CO遺族協定闘争

抜本的な改定を要求

患者・遺族に深まる不安

本年は〝CO・遺族協定〟の改定の年にあたり、十月初旬には中央交渉が予定されています。

病状が悪化するCO患者

六年前、あるいは三年前に比べて、CO患者の現状は、その病状が回復するどころか後遺症による老化の促進も加わって、病状悪化から入院する者が相次いでいます。職場に復帰したり、すでに退職したりした患者の中から、この三年間に四十四名（うち二十六名が過去一年間に入院。現在も十名が入院中）が、高血圧症や肝臓障害のために入院―退院をくり返しているのです。

さらには、闘いなかばに古賀輝夫さん、境瑞嗣さん、竹内秀昌さん、松本博さんの四人が、ガンや肝臓障害のため死亡しました。

三年前の協定により精密検査こそ実施されましたが、ガンや高血圧、肝臓障害などがCO中毒に起因するかどうかについては医師団の結論が得られず、病状悪化のため「再発認定」の申請を出したものの、いまだに放置され、「私傷病」扱いで休業している患者がいます。

これは明らかに、治療補償を打ち切られた患者として、その健康管理が放置されている上に、低賃金生活のなか、休業すれば生活ができなくなることから無理を押して出勤したところから、病状をこじらせる結果となったことを物語っています。早期発見、早期治療とともに、安心して治療に専念できる生活補償の確立が要求されているのは当然です。

セミの脱けがら同然の遺族

また遺族については、昨年十一月、アンニット・三池縫製の両工場に定年制が強行され、十九名の遺族が退職したあと、残業はあたりまえ、裁判とわかっていても欠勤がとりにくい、ちょっとしたミスでも大声で怒鳴られる、といった声があがるほど、仕事がきつくなっています。

以上のため、「遺族として、働きたい間は働ける」という、誘致工場本来の性格が半減してしまい、病弱者や家庭条件のよくない遺族はついていけなくなり、やめざるを得ないところに追いこまれています。

そのような遺族たちはまた、かろうじて子どもたちこそ一人まえの人間に育てあげたものの、当の本人はまるでセミの脱けがらのような状態になり、細々と暮らしています。

思えば大災害から十七年、私たちの実態はますます深まる不安な生活をおくっているのです。協定の抜本的改定をめざすことは、絶対に必要なことです。遺族、患者にその家族が、積極的な話し合いの中から要求をひき出して集め、やがてくる抜本的協定改定をめざし、今から闘う力をつくっていくよう努力しましょう。

×

（この項は、原告団提供）

職場から団結強化

怒り新たに闘い強める

職場二十三分会（CO患者の結集）は、八月四日定期総会を開いて「職場から団結を強化し、続出する入院患者を守り、三井資本に対する怒りを新たに」して闘うことを意志統一した。

きめた活動方針は、ほぼ次の通りである。

(1)一歩一歩結審に向かっている大災害裁判闘争を提起した原点に立ちかえり、その意義と目標を学習するとともに、具体的活動に取り組むため、一人ひとりのかかわり合いを強化する。

(2)造成職場の労働条件や環境問題を再点検し、低賃金生活の苦しみと不十分な健康管理の改善をめざして、協定改定に向けて、職場から闘いを強化する。

(3)スポーツやサークル活動を強化して、分会の人間関係の緊密化をはかる。

そのほか、職場新聞活動を強めることなどをきめた。

なお、新役員として小川紘志・分会長、佐藤勉・池畑重富の両副分会長ほかがきまった。

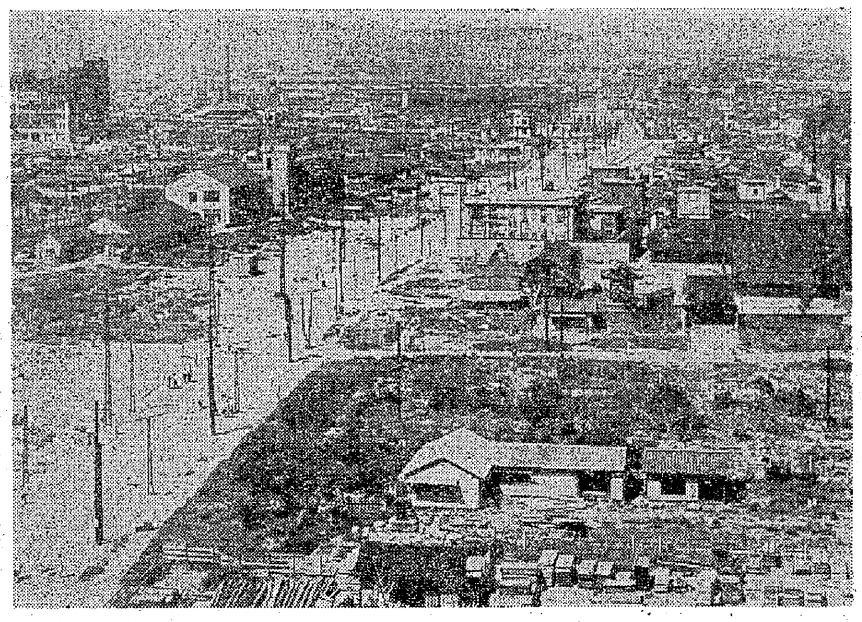
※

組合員、CO守る会の皆さん、本紙に原稿を寄せてください。

―編集部―

再び許すまい原水爆

焼け野ケ原と化した街に ヒトダマを見た戦中の思い出



写真は、太平洋戦争敗戦直後の大牟田の惨状。市役所の屋上から、築町方面をのぞむが、まさに一面の焼け野ケ原。戦争は何をもたらしたか。

手記

職場八分会　K生

私はさきの原水爆禁止長崎大会に参加したが、たびたびこの大会に参加してきたのも、その頃働いていた三井化学から小浜南社宅の住居に帰る途中で、長崎のあの原爆雲を見たことが忘れられないことからである。

大会や平和行進に参加する人は今では、戦時中の苦しい暮らしを知らない若者が中心になっているが、それだけにこの大会がいっそう大切になっているのではなかろうか。

幼い子どもの夢は軍人……

思えば、私たちは幼い子どもの頃、大人になったら軍人になり、陸軍や海軍の大将とうたわれる人間になれば……、ということが夢だった。戦争は人が殺し合うことで、大きな犯罪であるということの意識などまるでなく、また「戦争は悪いこと」などといえば、「あれはアカだ」といわれ、すぐ警察につかまる状態だった。

思想の自由などまるでなく、あるのは全生活に対する統制であった。国のためだといっては、物資の欠乏に耐え、金や銀、銅、鉄など金属類はすべておカミに差し出さなければならなかった。

一銭五厘のハガキ（召集令状のこと）がくると、親きょうだいとひき裂かれ戦争へ駆り出された。

私たちは、青春を知らずに大人になった。

大牟田や荒尾は、焼け野ケ原と化した。大牟田市の中心部は、市役所と松屋が残ったばかり。

物悲しくさまようヒトダマ

私は、たまたま働いていた三井化学で当直に就いていた夜、この目で、焼け野ケ原となったところをさまようヒトダマを見た。それは、親か、あるいはだれかをたずねてさまよっていたものと思うが、私は目でハッキリと、もの悲しげにさまようヒトダマを見ている。

二度と戦争を許してはならないと思うのである。

×

なお、原水爆禁止長崎大会には次のような海外代表が参加した。パラオ人民委員会、マーシャル群島やアメリカのハワイ州などの代表。ニューメキシコやアメリカ人被爆者に牧師、グアム島、マリアナ、オーストラリヤ、フィンランドなどの代表、オランダやフランスの民主的労働組合代表ほか。

私たちはとくに、被爆国の国民として戦争を再び許すことはできない。

なかま

職場二十六分会

松島邦子さん

▼…三池港務所の鉄道課機関庫に勤務する、現務掛の松島邦子さん。三池闘争が終った翌年、けい肺で亡くなった父親＝大坪栄さん（三川鉱勤務）との入替えで採用される。

初め人事に勤務したが、三池労組員だということで運輸課港駅へ。娘には酷な、鉄道のポイント掃除だった。

やがて、再び配転となり船積み係の現場へ。そして、三度目の不当な配転は去年の四月。荷役掛から機関庫へ。そのとき三池労組は、全組合員時限ストで会社に抗議したが……。

旧港務指導部の紅一点。そのときのことが、よほど暖く心に残っていると見え、「組合は、あのとき全組織の問題だとして闘ってくれ、ほんとうに力強く思いました」、と松島さん。

▼…趣味は読書。それに映画鑑賞。大牟田センター合唱団の一員として活動したこともある。

以前、宮浦支部青年部にいた夫の幸夫さんとの間にロマンスの花が咲き、昭和三十九年にめでたくゴールイン。

「女性として、港務所の現状をどう思いますか」と問えば、「昔からの人が減って、臨時の若い女性が多くなった。それらの人は賃金が八〇%。男子は数カ月で正社員になるのに、女性は短大卒でさえ差別。国際婦人年だというのに、ここではおよびもつかぬこと」、との返事。

「それに、組織人員が減っていくので、年少組合員の私たちには心細くて……」、とも語る松島さんである。

38歳。夫の幸夫さんとの中に中2と小5の子ども2人。大牟田市新港町6番地に居住。

罹災人口 55,410人

太平洋戦争時 大牟田に空襲5回

太平洋戦争で、大牟田は五回にわたって米空軍の空襲を受けた。昭和十九年の十一月、二十年の六月、七月、それに八月の二回。中でも二十年の七月二十七日は焼夷弾投下で、全市焼け野ケ原と化したもので、右の五回にわたる米空軍の空襲のため、大牟田市民は千二百九十一人が死傷。そのほか家が焼失したりするなど、全罹災人口は五万五千四百十人にものぼった。

焼夷攻撃の夜など一夜で壊滅して、罹災戸数八千二百三十戸。

（以上は、大牟田市役所の公報課の資料による）

なお、わが国全体の戦没死者は軍人軍属で約二百三十万人。民間人八十万人といわれている。